

目的 発達課題の観点からみれば、第1子の出生は夫婦の結合を2者関係から3者関係へと変化させ、新たな状況への適応を余儀なくする危機的な時期として捉えられる。本研究では、親子の結合が強いわが国において、親の役割を取得し遂行していく過程で生じる夫婦関係の変化と問題を明らかにするために、親になることの受容の仕方、夫婦関係の危機の有無、伴侶性の変化と満足感、夫婦の役割期待と行動を分析した。

方法 福岡市内の幼稚園と保育園を2カ所ずつ選び、園児の父母を対象として1985年10月に調査を行った。夫用と妻用を一組とする調査用紙をそれぞれ合わせて317部と256部配布し、回収した調査票のうち、長子が3～11歳の夫婦を分析の対象とした。分析に用いたサンプルの数は、幼稚園 270組と保育園 195組の計 465組の夫婦である。

結果 第1子の妊娠を知った時の夫と妻の反応をみると、親になることを最初から望んだ者ばかりではなく、とまどったり困ったという者が2割以上いる。結婚当初と第1子出生当初と現在の3時点を通して、少なくとも1度は別居や離婚を考えたことがある者は夫よりも妻の方が多いが、どの時期も夫婦関係はうまくいっているという者が妻でも7割強を占めている。夫婦の伴侶性については、楽しみを共にすることや一緒に過ごす時間などの面での減少が目立つ。夫婦の伴侶性に対する満足感は相対的に低いにもかかわらず、夫婦関係は形の上ではうまくいっており安定しているが、それは役割観や期待や遂行のあり方と関係があると考えられる。夫と妻はともに、互いを理解し思いやるという配偶者としての役割よりも、仕事熱心であることや父親あるいは母親の役割を重視している。